

## 言語感覚を豊かにするための工夫について

佐藤 安 治

### I はじめに

平成5年度に完全実施される「中学校学習指導要領」の国語科において、目標は次のように記されている。「国語を正確に理解し適切に表現する能力を高めるとともに、思考力や想像力を養い言語感覚を豊かにし、国語に対する認識を深め国語を尊重する態度を育てる。」この長い一文のどの部分を取ってみても、国語科において欠くことのできない大切な目標であることは言うまでもない。その中で、「言語感覚を豊かにする」という言葉は、昭和44年版の学習指導要領において、国語科全体の目標として登場する。この目標は、その後2回行われた改訂の中でも生き続け、さらに、その重要性を高めながら今日に至っている。平成元年の中学校指導書国語編には、生徒の言語感覚を豊かにすることの重要性が、次のように述べられている。

「言語に対する知的な認識を深めるだけでなく、このような言語に対する感覚を豊かなものにしていくことは、生徒個々の言語生活や言語活動を一層充実させ、かつ個性的なものにしていくため極めて重要である。豊かな言語感覚は、どのような事柄を指導すればすぐさま養えるというものではなく、国語科の適正な指導を積み重ねることによって身に付くことが期待される。また、一国の言語生活の豊かさは、国民一人一人のもつ言語感覚の程度によって評価されることも少なくない。このような意味で、言語感覚を豊かにすることが目標に掲げられているのである。」（下線は筆者）生徒一人一人の言語生活のレベルを引き上げることはもちろん、国民全体の言語生活のレベルを引き上げるためにも、言語感覚を豊かにしていくことが重要であるというのである。

言語感覚を豊かにするための指導には、様々な形態がもちろんあるのだろうが、「言語感覚を豊かにする」という目標は、概して、言語事項に関する指導の目標として考えられている傾向が強いのではなかろうか。確かに、語彙を豊かにする指導や文法の指導などは、その目標にそったものであるといえよう。しかし、文章を理解する上でも、鋭い言語感覚があればより深い読みも可能であろうし、表現活動においても、適切な言葉の選択などの面で、やはり鋭い言語感覚は必要となってくる。つまり、「言語感覚を豊かにする」という目標は、言語事項に関するだけでなく、理解・表現の分野まで広く覆っている目標であると考えべきであろう。

これだけ大切な目標として考えられている「言語感覚を豊かにする」であるが、いざ授業に反映させようとする段になると、困ってしまうことが多い。まず、「言語感覚」という抽象的な語句が理解しづらいし、どのような授業をすれば、生徒の言語感覚が豊かになるのかははっきりと見えてこないからである。そういった問題の分析を文献あるいは授業実践などから行い、言語感覚を豊かにする指導への配慮や工夫について考えていきたいと思う。

## Ⅱ 研究のねらい

本研究は、生徒の言語感覚を豊かにするためには、国語科においてどのような工夫や配慮をするべきか、実践を通して考察しようとするものである。

## Ⅲ 研究の基盤

### 1. 「言語感覚」について

まず、「言語感覚」という言葉について考えてみたい。学習指導要領に初めて「言語感覚」という言葉があらわれたのは、昭和35年改訂の高等学校学習指導要領においてであるが、扱いとしてはごく小さなものに過ぎなかった。そのころの文献では、「言語感覚」について、次のような説明がなされている。

「① 言語に対する感覚をいう。

② 単語に対する感覚は「語感」といわれるが、それよりも広く、語句や文章に対する感覚である。

③ 文法教育の根本問題として、この言語感覚をねることが大切である。誤った語句、文、文章に対して変だと思ひ、不安定な感じをもち、正しくないと感ずるのは、社会慣用の言語感覚を持っているからである。」(注1)

一般的な説明としてはこれで十分であろうが、「言語感覚」を文法の問題とのみ考えている点、あるいは、正誤の感覚とのみ考えている点、とらえ方がやや狭いように感じられる。

それが、昭和43年に始まる、小中高一連の改訂においては、教科の目標としての重要な位置を与えられるようになる。さらに、昭和52年からの改訂では、中核的目標として扱われるようになり、改訂ごとにその重要性を増してきている。このころになると、「言語感覚」に対する説明も詳しくなってくる。「言語感覚」について、谷口廣保氏は次のように述べている。

「広い意味での「言語感覚」とは、あらゆる言語活動における言語に対する感覚をいう。言語感覚の構成要素は、「語感」よりさらに複雑な要素に分析されるであろうが、その要素は大きく次の三項目に要約される。

① 言語の正誤に対する感覚 音声、文字言語のいずれにおいても、言語の不正確な使われ方や誤りに対して無関心ではいられない、正しく使いたいとする潔癖感ともいべき感覚である。言語の使用（文字表記なども含んで）が正しいか、誤っているかに鋭く気づき、正しくしていこうする態度につながる感覚である。

② 言語の美醜に対する感覚である。言語のどのような語句や使われ方を美、または醜と感ずるかは、人よっての差異も、時代的、社会的にも多少の差異はあることもあろうが、共通的な美的感覚というものはあるはずである。

例えば、言語・文章における音韻の調和感や、快いリズム感、表記された文字や使用された語句に対する美的価値認識の基盤をなしている感覚である。

③ 言語の使われ方に対する適否の感覚 目的、場所、相手に応じて、使われている語句や表現・表記が適切であるかどうかに対する厳密性を大切にする感覚である。相手の立場にも立って

## 言語感覚を豊かにするための工夫について

の言語の使われ方や、例えば敬語表現の適否などを、直感的に感じとり、自らもそれを適切に使用していこうとする選択能力の基礎となる感覚である。」(注2)

このころになって、「言語感覚」は、その構成要素として、正誤、美醜、適否の三つの感覚に分類されるようになってくる。昭和30年代の頃に比べると、その分析は進んだといえよう。また、「言語感覚」と国語科の分野の関係に対し、北川茂治氏は次のように述べている。

「「言語感覚」は、言語活動の具体的な場面で表現の適不適を直的に判断したり、理解活動において表現を味わったり適切に評価したりする感覚である。」(注3)

言語事項の指導にとどまらず、「言語感覚を豊かに」する指導は、理解活動(読む・聞く)や表現活動(書く・話す)の中にも存在するとしている点、そのとらえ方は広がりを見せているといえる。

### 2. 「豊かにする」ことについて

続いて、言語感覚を「豊かに」するとはどういうことか考えてみたい。小学校学習指導要領国語科では「言語感覚を養い」となっており、高等学校国語科では「言語感覚を磨き」となっている。生徒の発育段階に応じ、「養う」から「豊かにする」となり、「磨く」につながっていくのである。こう見れば、確かに中学校は小学校と高等学校との中間段階にあることは分かるが、具体的にどうすることかはなかなか見えてはこない。そこで、「言語感覚を豊かにし」という目標と特に関係の深い指導内容を、学習指導要領の中に見ることにする。

言語事項	[第1学年]
	ウ 事象や行為などを表す多様な <u>語句について理解を深め</u> 、 <u>語彙に関心をもつこと</u> 。
	[第2学年]
ウ 抽象的な概念などを表す多様な語句について理解を深め、 <u>語彙を増やすこと</u> 。	
[第3学年]	
イ それぞれの語句とその表す意味内容の対応について理解を深め、 <u>語感を磨き</u> 、 <u>語彙を豊かにすること</u> 。(下線は筆者)	

表現	[第1学年]
	オ <u>表現しようとする事柄や考え、気持ちにふさわしい語句を選び</u> 、 <u>文を整えて表現すること</u> 。
[第2学年]	
カ <u>表現しようとする内容と文脈にふさわしい語句を選び</u> 、 <u>文の形を工夫して表現すること</u> 。(下線は筆者)	

理	(第1学年)
	エ <u>語句の意味を文脈の中で正確にとらえ、理解すること。</u>
解	(第3学年)
	エ <u>文脈の中における語句の効果的な使い方について理解し、自分の言葉の使い方</u> に役立てること。(下線は筆者)

下線を引いた部分を中心に考えると、言語感覚を「豊かに」するという内容は、およそ次のように考えられる。

- ① 語彙を増やすこと。
- ② 鋭い語感をもつこと。
- ③ その場にあった語句を使うこと。
- ④ 語句について正解に理解をすること。

このうち①については、指導の範囲が広くまた多岐にわたるため、本稿での考察は行わないこととする。しかし、言語感覚を豊かにする指導には欠かすことのできないものであるため、つねに視野の中に入れておく必要がある。したがって本稿では、授業の目標に②～④の内容を反映させて、論を進めていくこととする。

#### IV 研究仮説

##### 1. 作業仮説

- (1) 生徒の言語感覚を豊かにするためには、単発的な取り立て指導にのみとどまらず、帯単元による継続的な指導を加えると、より一層の効果が期待できる。
- (2) 生徒自身が言葉を集め、それを授業に取り込むことにより、より能動的で活発な学習活動ができるようになる。

##### 2. 仮説設定の理由

- (1) 「言語感覚を豊かにする」という目標自体が、抽象的で幅の広いものであるため、それを達成することは決して容易なことではない。したがって、少しずつ、時間をかけて指導していく体制が必要となってくる。その際、長い期間をかけて行うものであるため、授業を行う者にとっても、授業を受ける者にとっても、一時にかかる負担が大きくならないように心がけることが大切である。
- (2) 言葉に対する興味や関心は、生徒一人一人全く違う。また、「言語感覚」においても、そのレベルや方向も違っている。こういった状況の中で言葉の学習を行う場合、教師が用意した材料だけでは、どうしても生徒の要求に答えることは難しく、受け身の授業になりがちである。それならば、学習の素材を生徒自らに探させたらどうだろうか。探させる範囲や程度を考慮しておく必要はあるが、自分が探してきた言葉が授業で取り上げられるとなると、生徒の姿勢もより積極的になるのではないかと考えた。

## V 実際の授業

### 1. 単元名 「気になる言葉を探す」(2年生 平成4年4月～)

### 2. 単元設定の理由と学習基盤

普段の生活の中で、生徒は話し、聞き、書き、読む活動をいたるところで行っている。例えば、休憩時間での友達との会話、流行語や俗語が盛んに飛び交い、ちょっと聞いただけでは理解できないこともある。こういった会話は、われわれ大人の立場からは批判的な目でみられることが多い。確かに、公の場(授業中も含む)で使うには不向きな言葉なのであろうが、かといって、こういった言葉を頭から否定してかかるのはどうであろうか。大人達からは否定される言葉であっても、自分達の間では必要であるからこそ存在している言葉としてとらえることはできないであろうか。こういったことを考えているうちに、生徒が普段の生活の中で「気になる言葉」を集めてみてはどうかと思いついた。そうすれば、生徒が、今どのようなところ(情報源)から言葉を集めてくるか、あるいは、どのような言葉(ジャンル)に興味を持っているかが分かるはずである。さらに、そうして集めた言葉が増えてくると、そこからまた統計的な処理や分類の授業や、話し合いの学習が組み立てられるのではないかという気持ちもあり、この「気になる言葉を探す」という単元(以後、「気になる言葉」と略記する)を設定した。

帯単元にしたのは、気になる言葉を生徒自身が探すのであるから、探すための時間的余裕が必要であることが一つの理由である。そして、一回だけで終わってしまったのでは、データの量が不足であり、そこからの発展学習も貧弱なものにしかならないし、自らの言語生活に興味や関心を抱かせるためにも、継続的に「気になる言葉」を集める必要があったからである。

ここでいう「気になる」とは、「どうも気に入らない」「おかしいんじゃないか」といった否定的な見方はもちろん含んでいる言葉である。しかし、それだけではなく「なかなか面白いんじゃないか」「結構気に入っている」といった見方や、「どうしてそうなっているんだろう」「もっと知りたい」といった見方も含んだ言葉である。したがって、前出の「言語感覚」を構成する三要素である正誤、美醜、適否の感覚を「気になる」という言葉でカバーできるのではないかと考える。

さて、この単元を始めるにあたってまず頭を痛めたのが、気になる言葉をどう集めるかということであった。探してきた言葉をカードに書いて提出するようにしようと考えてはいたが、いざ気になる言葉のカード(以後、カードとする)を作る段階になると、大きさ、形、項目の内容、項目の数がなかなか決まらない。整理のこともあるので、B6(葉書大)の大きさにし、クラス毎にファイルで綴じることにした。それにともない、項目も次に挙げる8項目としてスタートすることにした。(資料1を参照されたい)

- ① 生徒番号
- ② 氏名
- ③ 気になる言葉
- ④ いつ……………気になる言葉を見つけた(考えた)日時
- ⑤ どこで……………気になる言葉を見つけた(考えた)場所
- ⑥ 誰から何から……………気になる言葉を見つけたメディア、教えてもらった

⑦ こんな時に使う …………… 気になる言葉の使用例

⑧ 感想

また、カードの色は4色（青、緑、黄、桃）を用意し、各4学級に毎回違う色のカードを配布した。これは、学級間でカードが紛れてしまわないようにということ、締め切りをきちんと守る意識を持たせること、気分を変えることなどを狙ったものである。

本校には固定の時間割がなく、毎週異なった時間割のもとで授業が行われる。そのため、「気になる言葉」の授業日や提出日がなかなか固定できない。そこで、帯単元の「気になる言葉」の授業を行う毎にカードを配り、約1週間後（行事が間にはさまる場合には、約2週間）に締め切りを設定するという形で提出させることにした。カードの内容、提出日については、とりあえずこのような形で始めたが、授業を行う中で改善点がいくつか見えてきた。その改善点については、〔5. 授業の実際と反省（3）〕でくわしく述べることにする。

### 3. 目 標

- ・自分の身の周りにおける言葉に対し、興味・関心を持つことができる。
- ・いろいろな生活場面の中から、気になる言葉を見つけることができる。
- ・自分あるいは他の生徒の気になる言葉に対し、正誤、美醜、適否といった判断をすることができる。
- ・気になる言葉を、実際の生活の中で使うことができる。

### 4. 指導計画（計 15.5 時間、ただし第四次以降は、まだ実施していない。）

- |     |  |                     |
|-----|--|---------------------|
| 第一次 | ・単元についての説明を聞く。                                     | （0.5時間）             |
| 第二次 | ・いくつかの気になる言葉について考える。<br>・「気になる言葉」1学期のまとめを行う。       | （0.3時間×8回）<br>（1時間） |
| 第三次 | ・いくつかの気になる言葉について考える。<br>・「気になる言葉」2学期（平成4年）のまとめを行う。 | （0.3時間×7回）<br>（5時間） |
| 第四次 | ・いくつかの気になる言葉について考える。<br>・「気になる言葉」3学期（1年間）のまとめを行う。  | （0.3時間×5回）<br>（3時間） |

### 5. 授業の実際と反省（指導計画にしたがって）

#### (1) 第一次 〈単元についての説明を聞く〉

カード（資料1）とプリント（資料2）を生徒に配布し、これらをもとに単元の説明を行った。この説明で力を入れたのは次の事柄である。

- ・帯単元の形で学習を行うこと。
- ・ふだん何気なく見過ごしている言葉に目を向け、自分自身の言葉の世界を広める学習であること。
- ・「気になる言葉」といっても、最初はなかなか気にならないので、まずは言葉を「気にする」ように心がけること。
- ・「気になる言葉」にはいくつかの意味があり、いろいろな角度から言葉を見ていくように心がけること。

## 言語感覚を豊かにするための工夫について

生徒は、帯单元形式の学習を行った経験がなく、説明を聞いているときも、今一つふに落ちない様子であった。また、約1週間の間にカードを書いて出すことにはかなりの抵抗感を抱いていたようで、2学期のまとめの段階で書いた感想には「初めは、『えーそんな毎週毎週あるわけないし、たいぎい。』と思っていた。』というものもあった。その反面、「なかなか今までにない企画だったので良かった。」「これを始めるという考えが面白い。」といった感想もあり、今までにない新しい形の学習が始まるという期待感もあったようである。

### (2) 第二次

ア いくつかの「気になる言葉」について考える。

(第二次のアの内容は、第三次及び第四次においてもほぼ同じである。したがって、第三次、第四次での説明は割愛する。)

第二次に行った、帯单元の具体的な授業内容は次の通りである。

- ① 前回提出分から優秀作品を選び、プリント(資料3)に印刷して、配布する。
- ② プリントに自分のカードが載った者は、教卓の所まで出て、カードの説明を行う。
- ③ 説明に対し、その生徒に教師が質問をし、補足をさせる。
- ④ 補足説明をし、コメントを加える。
- ⑤ 次回提出分のカードを配り、提出日を確認する。

以上①～⑤の流れが、帯单元としての中核をなす部分であるが、それぞれについて述べることにする。まず、①についてであるが、優秀作品を選ぶ基準は、話題性のあるもの(「冬彦さん、マスオさん」など)、国語の問題として論議されているもの(「ら抜き言葉」「なんか、～みたいなの」など)を中心にして、驚き感心させられる内容を持つものに置いたつもりである。そして、原則として1枚のプリントには各学級より2名、計8名載せることとした。これは、できるだけ多くの者の作品を紹介したいということと、多く載せて焦点がぼけてしまわないようにということに配慮したものである。

そうして選ばれた作品が載っているプリントを、生徒は毎回、楽しみにしているようである。ある生徒の感想を見てみよう。

・自分では、思いもなかったことを書いている人がいて、驚かされた。感想のところが興味深くて、鋭い指摘をしているのがよくあった。どうしてこんな言葉、見つけたんだろう? とよく思った。身近にあるのに気づかない言葉ってけっこうあるものなんだな。(A子)

・プリントに載った人の作品を読んでいると、色々と自分の気づかなかった言葉や気にもとめなかった普通の言葉が、「そう言われてみれば……」という感じで見直すことができている。(B子)

ここからは、他の生徒の発想の豊かさ、分析の鋭さに素直に感心している姿が、思い浮かん

でくる。他の生徒が探してきた言葉に触れることによって新しい発見をし、そこから語彙を増やしたり語感の幅を広げていることが分かる。さらに、生徒が優秀作品のプリントを楽しみにしている理由がもう一つ考えられる。ある生徒の感想には次のようにある。

・「さるぐつわ」は載ると思ったのに、載らなかったのが結構悔しい。もうちょっとレベルを日常に向けたほうがいいなと思う。案外いいネタがあるかもしれない。あと一枚は載りたいところだ。  
(C男)

・いままで、ずっと出し続けられて良かったと思う。それに2回載ったし、満足のゆく結果となった。これからもがんばろうと思う。  
(D子)

40人全員がカードを提出したとしても、プリントに載るのは1クラス多くても2人までである。競争率は20倍となり、プリントに載ることは至難の技である。それだけに、自分の探してきた言葉がプリントに載ったときは、うれしさも大きいのであろう。このような点、言葉に対する生徒の興味・関心を持続させることに役だっているといえよう。

次に②であるが、説明する生徒は、授業で初めて自分のカードがプリントに載ったことを知る。そのため、発表はぶつつけ本番という形になってしまう。中には、話をふくらましながら上手に説明をする生徒もいるが、大半は、感想の部分を詳しく話す程度でとどまってしまった。その場合、後の質問でカバーしたが、前もって打ち合わせることができれば、生徒の発表はより充実したものになったはずである。時間の問題もあってなかなか難しい面もあるが、これからの検討課題である。

③の質問は、質問をすることによって、より具体的な説明を引き出そうとするために行った。あらかじめ用意していた質問がほとんどであったが、「こういうことを聞くと、話がふくらむのではないかと」と、その場で考えた質問を試みたこともあった。「感想」のあたりから話を広げていくと、説明する生徒も話しやすかったようである。時には質問を、聞いている生徒に対しても行い、反応を確かめたこともあった。聞く側の生徒に対しては、説明されている言葉の同義語、語源などを聞くことが多かったが、積極的に発言していたのが印象的であった。今後は、聞いている生徒の側からも質問、感想、意見が出てくるような展開にしていきたいと思う。

④では、プリントに言葉が載った生徒の発想の良さを説明することに力をいれた。気になる言葉がなかなか見つからずに苦労している生徒に対し、具体的な基準(例)を示すことによって、ヒントをつかませるねらいがそこにはあった。そして、プリントによる説明を何回か行っているうちに、そこから得たヒントを生かして気になる言葉を探そうとする姿勢が徐々にではあるが見えてきた。

イ 「気になる言葉」1学期のまとめを行う。

帯単元の授業が軌道に乗ったところで、中間まとめの授業を計画した。プリント(資料4)



### 言語感覚を豊かにするための工夫について

を使用し、気になる言葉を探すときの自分の傾向について考えさせた。2学期末には、カードを分類する授業を計画していたので、分類するための準備、練習の意味が強い学習であった。また、自分の傾向を確認することで、言葉の偏りに気づかせたいということもあった。

まず、資料4を使い、(一)でジャンル別、メディア別に分けさせたのだが、ジャンル別の分類に困る生徒が多かった。これは、①から④の項目が細かすぎて、うまく適合しないからであった。もう少し、範囲の広い言葉に変えるべきであったと反省している。しかし、(二)(三)の部分の書き込みはスムーズに流れ、自分の傾向はとらえることができていた。

また、資料4のプリントを早く書き終えた者には何枚かのカードを渡し、今まで書ききれなかった「気になる言葉」を書くよう指示した。このことも、2学期末のまとめの学習を意識し、少しでも言葉のストックを増やしておきたいという意図によるものである。

#### (3) 第三次

ア いくつかの「気になる言葉」について考える。〈省略〉

イ 「気になる言葉」2学期（平成4年）のまとめを行う。

まず、8カ月間にわたって学習してきた「気になる言葉」という帯単元に対する感想を書かせることから開始した。同時に、授業に対する改善点も考えさせた。結果を表にすると次のようになる。

表1 〈授業に対する感想〉

感 想	人数 (学年 155名)	%
楽しんで授業が受けられた (面白かった)	43	27.7
集めるのが大変だった	39	25.2
友達の探した言葉に感心した (友達の作品を見るのが楽しみ)	30	19.4
以前より言葉に注意を払うようになった	26	16.8
日本語のいろいろな面を見ることができた	20	12.9
プリントに作品が載ってうれしい (載らなくて悔しい)	13	8.4
語彙が増えた	7	4.5

表2. 〈授業の改善点〉

締め切りに関して	今より締め切りまでの期間を短くする	9名
	定期的にする（例外なく1カ月に一度というように）	6名
	今より締め切りまでの期間を伸ばす	5名
	国語係を通じて、締め切り日をもっとはっきり	1名
カードの構成に関して	考察（分析）の欄を設ける	4名
	書く欄のスペースのバランスをよく	3名
	いつ、どこ、何からをはっきり書く	2名
優秀作品のプリントに関して	プリントに載せる人を増やす	14名
	クラスの枠をはずすべき（言葉の内容で選ぶ）	9名
	プリントに載せる言葉のジャンルを均一に	6名
	惜しくも選にもれた作品は言葉だけでも載せる	5名
	教師のコメントを書く	1名
	特になし（このままでよい）	36名

表1の〈授業に対する感想〉を見ると、全体としては、楽しみながらこの単元に取り組めた生徒が多かったことがうかがえる。反面、言葉を探するのに苦労している生徒も多く、言葉への切り込み方を今後も継続的に指導して行く必要があることを示している。余談ではあるが、感想の中に反省のコメントが非常に多かったことをつけ加えておきたい。反省を書けとはしていないのであるが、カードが出せなかったことを悔やみ、来学期への決意表明までしている生徒もあった。このことは、言葉を集めることへの意欲のあらわれと見てよいのであろうか。

表2の〈授業の改善点〉で一番多いのは、今まで通りのやり方でよいと言う意見であった。筆者としては、もっと多くの要望がでてくるのではないかという予想をしていたため、この結果はやや意外であった。ともあれ、3学期以降も、今までのやり方を基本に授業を進める方向は定まったように思われる。また、数は少ないが、改善への指摘には考慮すべきものが少なくない。特に、「惜しくも選にもれた作品は言葉だけでも載せる」という意見については、早速取り入れていきたいと思う。

感想、改善点を書き終えた生徒には、1、2学期に提出したカードをまず配った。毎回提出している者は15枚、カードを手にするようになる。その上、一度に2枚以上提出したり、1学期のまとめの時に書き足したカードのある者は、15枚以上配られることもあった。そうなると、提出率の悪かった生徒との差が大きくなるため、そういった生徒には教師が用意したカードを渡し、極端な開きがないよう配慮した。続いて、プリント（資料5）を配り、カードの内容を転記させ

言語感覚を豊かにするための工夫について

た。書き上げたもの（資料6）を例として挙げておく。

転記の終わった生徒は新たなプリント（資料7）を持ち帰り、各学級の最優秀作品を選んだ。選ぶ基準を、生徒の目からみて一番「よい」（面白い、鋭い）といったところに置き、各学級から2人ずつ、計8人を選ばせた。集計結果は次のようである。

順位	順番	学級	氏名	気になる言葉	意味、内容	得票
1	⑭	1	福 富	いかじ	「行こう」の方言	52
2	⑮	1	広 江	あっだーん	「しまった」の方言	38
3	⑥	1	八 幡	乙だね	なぜ「乙」の字を使う	34
4	⑧	3	石 田	じゅうせいペン	人名を商品名に使う	31
5	⑧	2	寺 井	凹凸	筆順は？漢字か？	30
6	②	4	石 井	ばくる	「盗む」の俗語	28
7	⑪	1	清 水	冬彦さん、マスオさん	流行語、テレビの影響	26
8	⑪	2	淀 江	松竹梅	日本人的感觉	24
8	⑪	2	畑 尾	今まで生きてきた中で一番幸せ	流行語、金メダリスト岩崎恭子の言葉	24
8	⑭	4	千 代	D（ディー）とD（デー）	発音の違い	24

生徒にとって関心の高い言葉は、テレビからの流行語や、普段の生活の中で使われる俗語、造語であることがうかがえる。生徒の言語生活に与えるテレビの影響が論議されるようになって久しいが、テレビの中のどんな言葉に生徒は敏感に反応しているか、継続的に見ていく必要があるであろう。さらに、生徒の間でしか使われない言葉（俗語、造語など）についても、なぜそのような言葉が存在するのかということまで突っ込んで考えさせていきたいと思う。

続いて、カードの分類作業に入った。座席表（資料8）にしたがって班を作り、各々持ち寄ったカードを話し合いの中で分類するという作業である。班を作る際考慮したことは、学習リーダーを必ず入れること（網掛けの生徒）、そして、班のカードの合計がほぼ同じになるようにすることなどである。分類の基準は、あらかじめ生徒自身に考えさせていたものを中心として、話し合いの中で新しく作っていくよう指示をした。各班にホワイトボード（60cm×90cm）とペンを渡し、ホワイトボードの上に言葉を書きながら分類作業を進めていった。まず、方言の項目をたてて分類を始めた班が多かったようである。分類を進めていくにしたがって、複数の項目にまたがる言葉が発生してくる。そこで、方向修正を余儀なくされた班もあり、また、新たに項目を作ることで解決した班もあった。そうした試行錯誤の中で、一通り分類が出来上がっていった。そして、他の班の分類も見ようということで、各班ともホワイトボードを教室の四隅に掲げて、順番に見て回った。見て回るときのポイントとして挙げたのは次の4項目である。

- ① 分類の重なり具合（どの程度分類の基準をもっているか）
- ② 分類の名前の付け方（各項目の見出しは適切か）
- ③ カードの偏り（バランスよく言葉が集められているか）
- ④ 分類のおかしいところ（間違った分類をしていないか）

このポイントにしたがって、生徒は他の班の分類をチェックしていった。以下、分類の例（資料9）と、生徒のコメントを挙げておく。

（資料9）

<p>方言</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・死んどった</li> <li>・はがいで</li> <li>・われ</li> <li>・そら</li> <li>・おん、めん</li> <li>・～だが</li> </ul>	<p>数に関する言葉</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・パイ（イカ）</li> <li>・ゼロ（零）</li> </ul>	<p>熟語</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・天気・乞食</li> <li>・田舎・王様</li> <li>・友達・大臣</li> <li>・個人戦</li> <li>・二枚目</li> </ul>	<p>一時的流行語</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・しーん</li> <li>・ほかほかごはん</li> <li>・～でさー</li> <li>・ごめん</li> <li>・あそばせ</li> <li>・まねござる</li> <li>・めがねざる</li> </ul>
<p>慣用句</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・犬猿の仲</li> </ul>	<p>外来語</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ミュージシャン</li> <li>・オムニバス</li> <li>・エキゾチック</li> <li>・イントネーション</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ラジオ</li> <li>・プライド</li> <li>・チーム</li> <li>・テレカ</li> <li>・エアコン</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・英検</li> <li>・外人</li> </ul>
	<p>英語</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・MORNING</li> <li>・PKO</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ソ連</li> </ul>	<p>略語</p>

4組5班

- ・「熟語」があやしい。何でも入ってしまうのでは。
- ・「PKO」は英語なのだろうか？
- ・外来語が意外と多い。
- ・「ほかほかごはん」がちょっとあやしい。
- ・ジャンルが広すぎる。
- ・外来語と略語が中心となった分け方だ。
- ・もう少し重なりが欲しかった。
- ・きれいに分けてあると思った。

図を見ると、出来上がった分類にはまだまだ不十分なところが多いことが分かる。また、そうした間違いに生徒が敏感であることも、コメントからうかがえる。こうした学習を通じて、同じ言葉であっても、少し見方を変えただけで分類の仕方も大きく変わってくるということを、生徒は理解できたのではないだろうか。このことはすなわち、言葉を多角的に見ることへの第一歩を踏み出したことになるといえよう。

#### (4) 第四次

ア いくつかの「気になる言葉」について考える。〈省略〉

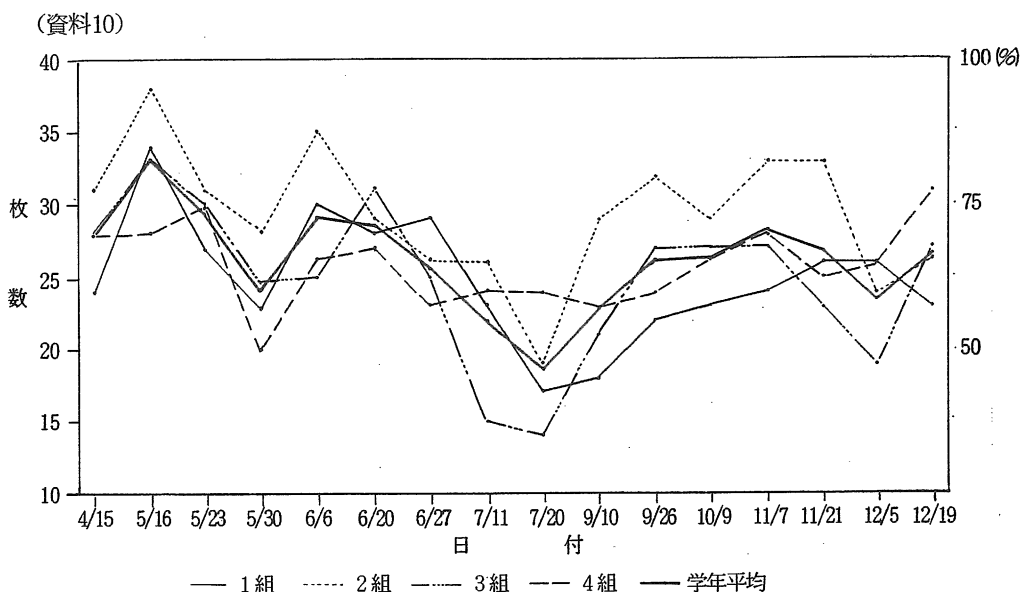
イ 「気になる言葉」3学期のまとめを行う。

3学期のまとめの学習については、現在のところ「気になる言葉」に関するレポートを書く学習を考えている。言葉の問題に関するテーマを一つ決め、文献を調べたり、アンケートを取ったりしながらレポートをまとめていく形にしたい。そのため、生徒が必要としている文献をあらかじめ用意しておけるよう準備を進めたい。

## VI 考 察

### 1. 帯单元による学習について

1年間にわたる「気になる言葉を探す」という帯单元を始めるにあたって、筆者が一番懸念したことは、生徒の興味・関心が、学習に慣れていくにしたがい低下していくことであった。いわゆる「なかだるみ」の状態である。まず、カードの提出率の推移の様子（資料10）を見てみよう。



单元を開始した当初には75パーセント近くあった提出率が、1学期末には50パーセントに低下している。2学期の末には65パーセント程度にまで回復してはいるが、数字が示すとおり、「なかだるみ」の状態が存在していたことは明らかである。提出したカードの数が多からといって、必ずしも優秀な作品が多くなるとは限らないが、この单元は生徒の提出するカードによって成り立っていること、生徒の興味・関心を持続させることを考え合わせると、今後も提出への呼びかけを続けていく必要がある。

また、この帯单元を通じての自己の変容を、次のように書いた生徒もいた。

- ・「気になる言葉」が始まった時は、いやでいやでしかたがなかった。いつも出す言葉がなくて困っていた。だけど、2学期になってからは、自然に自分から探すようになって、最近はやさしく楽しみながらできるようになったのでよかったと思う。(E子)

「いやでいやでしかたがなかった」のが「けっこう楽しみながらできるようになった」というのだから、相当の変わりようである。この生徒が言うように、1学期は6割位の提出率であったものが、2学期になると9割近くにまで上昇している。さらに、2学期には2回プリントに載り、「気になる言葉」の内容自体も充実してきている。

・最初はすごくめんどくさかったけど、最近は楽しい。1週間に1回みんなが考えたのを見るのも楽しい。  
(F子)

この生徒も(1)の生徒と同様に、徐々に提出率、内容共によくなってきている。2学期になって、一度プリントに作品が載っている。注目すべきは、1学期には「気になる言葉」のほとんどが雑誌やテレビからのものであったのが、2学期になると、級友の言葉から選んだ言葉が多くなる点である。これは、この帯単元の学習を進めていく中で、気になる言葉を自分の身の回りから探そうとする姿勢が芽生えてきたことを示すものではなかろうか。

提出率においては、「なかだるみ」現象が確かに見られたが、例にあるように、個々の生徒においては、状況はやや変わってくる。単元開始当初、「めんどくさい」「言葉が見つからない」といった理由で、学習に対する抵抗感を抱いていた生徒が、「気になる言葉」の学習を繰り返し経験する中で、友達の作品が載ったプリントに触発され、自分の作品がプリントに載る喜びを感じながら、次第に学習の内容や意義を理解するようになった。このように、帯単元による計画的継続的な学習を組むことによって、言葉という広く大きなものを学習の対象としても、意欲を失わず取り組めるのではないだろうか。

## 2. 生徒自身が言葉を集め、それを授業に取りこむこと

### (1) 優秀作品のプリント（資料3を参照されたい）

生徒は、優秀作品のプリントを見るのが好きである。このことは、〔5 実際の授業と反省(2)〕で述べたとおりである。他の生徒の作品に感心し、自分も見習おうとする。あるいは、自分の作品をプリントに載せようと、力を入れて言葉を探す。1枚のプリントが、次の気になる言葉を生み出すための活性化剤になっているかのようである。言葉に注意を払うこと、語彙を増やすことなど、生徒はこのプリントから多くのことを学ぶことができたと思う。と同時に、筆者自身も得るところが多かった。例えば、生徒が今どんな言語環境の中で生活しており、どんな言葉に興味を持っているか知ることができたことなどである。毎回優秀作品を選ぶのには苦労するが、また、楽しみでもある。

### (2) 集めた言葉を分類する学習

まず、自分達で集めた言葉が、学習の材料になるという点が最も重要である。分類するためには、班の生徒に自分が集めたカードの説明をする必要がある。そのカードの説明ができるのは自分だけであるという喜び（自分のカードが授業で使われているという喜び）は、この学習を支える大きな要素となった。分類には2時間という長い時間を要したが、その間の生徒の話し合いは活発に行われていた。もしこれが、教師の用意した言葉での分類という学習であったなら、ここまで活発な分類活動になったかどうかは、はなはだ疑問である。

以上のように見てくると、生徒自身が言葉を集め、それを学習の材料として授業に取り込むことは、学習活動をより能動的で活発なものにしていく一つの方策であると言えそうである。ただ、授業を組む場合に注意しておかなければならないのは、生徒が集めた言葉の処理の仕方を効率よく行

うことである。プリントにして配布するにしても、分類して見出しをつけるにしても、かなり煩雑な作業を伴う。帯単元として継続的に行う指導の場合には、特に気をつけたいことである。

## Ⅶ 研究の成果と今後の課題

### 1. 「言語感覚を豊かにする」という目標について

「言語感覚を豊かにする」という目標について、その内実を考察し、中学校段階で育成したい力として、いくつかの項目に示すことができた。しかし、「言語感覚を豊かにする」という目標は、抽象度が高く幅の広い目標であるため、本研究で示した項目だけでは、充分だとは言いがたい。さらに多くの文献、資料にあたって、分析していく必要がある。

### 2. 「帯単元」について

言語感覚を豊かにすることは、一朝一夕にできることではない。したがって、継続的に指導することが必要である。そのためには「帯単元」という学習形態が必要であり、また有効であることが分かった。計画的で継続的な指導の中で、生徒は徐々にではあるが、言葉に注意を払うようになり、語彙を増やしていくことができる。

継続的な指導を行う上で障害となるのは、「なかだるみ」の問題である。本研究でも提出物の中だるみ状態があったが、ある程度はやむを得ないとしても、こまめな呼びかけ、単元の授業に変化を持たすなどの工夫をすべきであったのではなかろうか。今後の課題である。

### 3. 学習の素材を生徒が集めた言葉に求めることについて

教師から与えられた言葉と、自分で探してきた言葉とでは、学習に対する構えから違ってくる。このことを強く感じた。さらに、その言葉の提示の仕方いかんによっては、より生徒の活発な学習活動を促すこともできることも分かった。が、生徒の集めてくる言葉は、数も多いうえに種類（ジャンル）も複雑である。それを適切に、しかもすばやく処理して提示するのはなかなか大変である。この点は、今後も試行錯誤の中で改善していかなければならないだろう。

### 4. 他の学習との関連

この「気になる言葉」という単元では、言語感覚を豊かにすることを主眼に置いて指導を行ってきた。もちろん、「聞く話す」「読む書く」という活動を通して、言語感覚を豊かにしていくわけであるが、特に「聞く話す」活動との関連が目される。実際の授業では、生徒によるプリントの説明での「聞く話す」、あるいは、分類をする時の話し合いなどがあった。これらの学習の際に、もっと「聞く話す」に焦点を当てた授業を行っていたら、また違った展開が期待できたのではなかろうか。さらに、「読む書く」との関連を意識した授業といったことも、今後の課題として残っている。

(注1) 「国語指導法事典」P 37 奥水実編 明治図書 1962

(注2) 「国語教育研究大事典」P 252、253 国語教育研究所編 明治図書 1988

(注3) 「改訂 中学校学習指導要領の展開 国語科編」P 32  
北川茂治、渡辺実編 明治図書 1989

<主な参考文献>

- ・「国語教育実践講座」第2巻 国語教育の理念 教育出版センター 1986
- ・「国語教育実践講座」第11巻 言語事項の指導 教育出版センター 1986
- ・「言語事項用語辞典」 教育出版 1979
- ・「日本文法事典」 有精堂 1981
- ・「教育科学国語教育」第247号 明治図書 1978
- ・島根大学教育学部附属中学校 研究紀要 第31～34号

(資料1)

感想	う時こ にん 使な	何誰 から から	どこ で	いつ	る気 言葉 にな	番号	生徒
						氏名	
				月 日			





(資料4)

・「気になる言葉」一学期のまとめ

組
---

いま、あなたの手元には、一学期間に書いた「気になる言葉」が何枚かあるはず  
です。そのカードを比べてみて、自分の傾向を考えてみましょう。

(一) そのカードをジャンル別、メディア別に分けると？

①	名詞	⑧	会話の言葉	H	その他
②	代名詞	⑨	その他	G	
③	動詞	⑩	外国語	F	ふと思った
④	形容詞	⑪	俗語	E	会話から
⑤	形容動詞	⑫	流行語	D	新聞から
⑥	接統詞	⑬	その他	C	ラジオから
⑦	方言	⑭		B	テレビから
⑧	会話の言葉	⑮		A	本から

(二) それぞれの「気になる言葉」をどう思っているか？

ア	「気に入らない」「好きじゃない」「よくない」「ちよっとね」
イ	「なかなかいい」「いいと思う」「好きだ」「悪くない」
ウ	「よく分からない」「不思議だ」「なぜそうなったのだろう」
エ	
オ	その他

(三) 結論

「気になる言葉」を探するときの私の傾向は、

--

(資料5)

・「気になる言葉」1992年のまとめ 1組

組	氏名
---	----

最初	更紙				
5/16	黄				
5/23	青				
5/30	緑				
6/6	桃				
6/20	黄				
6/27	青				
7/11	橙				
7/20	青				
9/10	緑				
9/26	桃				
10/9	黄				
11/7	青				
11/21	緑				
12/5	桃				

上の表から見えること  
(私の傾向)

3学期には、こんな方面の言葉を探してみたい



(資料8)

教卓

1班	2班	3班	4班
[ 西村 禿 ]	[ 川角 野津 ]	[ 正木 加藤 ]	[ 小野 澤 ]
[ 伊藤 千代 ]	[ 升田 青戸 ]	[ 馬場 芦田 ]	[ 大月 奥原 ]
5班	6班	7班	8班
[ 八杉 安達 ]	[ 森本 金藤 ]	[ 神武 鳥山 ]	[ 石井 松浦 ]
[ 中村 門脇 ]	[ 岡田 山本 ]	[ 池田 飯泉 ]	[ 坪内 糸川 ]
9班	10班		
[ 佐藤 坂田 ]	[ 吉原 岩田 ]		
[ 小村 ]	[ 神庭 横木 ]		

※ 網掛けの生徒は、まとめ役を頼みます。まとめ役の仕事としては、話が脱線しそうな時に、もとへ引き戻すこと、また、カードのまとめりごとにペンで囲むことなどがあります。